interview

能楽師にして三児の母
「結婚、出産しても続けられる」
“前例作り”二足の草鞋で奮闘

埼玉県は所沢市、西武鉄道の西所沢駅から閑静な住宅街を抜け、北西に歩みを進めると、思いがけず一面の茶畑が広がる。茶畑の周囲を33体もの観音菩薩像が固め、中央に配された観音堂が圧倒的な存在感を放つ。真言宗豊山派の上洗山・普門院が昨年４月に造立した「所沢三十三観音霊場・観音堂」だ。江戸時代に現在の地に移ったとされる由緒ある普門院に身を置くのが、シテ方観世流の能楽師・新井麻衣子氏。今回は、三児の母でもある新井氏に、能楽師としての思い、子育てと能の舞台との両立について聞いた。（聞き手・早坂美都副会長）

―能楽師を目指したきっかけを教えてください。

夫との出会いを通して新井家の人たちと知り合ったことがきっかけです。義父は声明（仏教音楽）を、義母は平曲（平家琵琶）をやっていて、宝玉院というお寺で「日本伝統音楽研究所」として、講座を開いていました。その時に能楽の講師として来てくださったのが故足立禮子先生で、現役の女流能楽師で魅力的な先生でした。当時20歳だった私は、お茶の水女子大学入学後も自分が何をしたいかわからないもやもやした時期だったのです。「本当の豊かさとは何か」という問題意識が根底にあり、社会学を専攻していたということもあり、当時78歳の先生と出会い、輝いて生きていらっしゃる姿に魅了され、それから能楽にのめり込みました。大学3年時に進路を考える頃、能楽の道に進むことを両親が応援してくれたこともあり、東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻への進学を決めました。

―より専門的な領域で能楽を学ぶことになったのですね。進学してからはいかがでしたか。

藝大時代はプロの世界に進む決意まではできておらず、実際に楽屋で勉強することになった時、右も左もわからない世界で、さらに男性社会ということで怖気付いて、「ここでは生きられない」と感じました。先生に泣きついたこともありましたが、その時先生の戦争体験のお話を聞き、自分の悩みはちっぽけなものだと感じて、そこからは迷うことなく進むようになりましたね。藝大卒業後は、観世九皐会という一門に入り、勉強を始めました。迷いがある頃に先生にお会いしたことで人生が変わりました。

―足立先生の教えで印象的だったことは。

先生が亡くなってからも私の核になっているのが「邪（よこしま）な心では能は舞えない」ということです。能楽では、神羅万象すべてが物語の主人公になるので、清らかな心と生き方でなければ、いろいろな人格になりきることはできないと教えていただきました。技術的なことだけでなくて、生き様自体に教えをいただいた感覚でした。

―ご自身にとって能楽はどのようなものですか。

能楽には宗教的、普遍的な側面があります。恋の悩みも、子どもを失った悲しみも、現代にも通じる人間としての普遍的なテーマで、祈ったり、何かに救われたりすることは変わらずにあるものだと思います。そういった感覚は、舞台芸能に携わる者として、また、寺を守る者としても忘れずにいたいと思います。650年もの長い歴史でいくつもの危機的な状況を乗り越えて続いているのは、そこに「変わらない何か」があるからだと感じます。能楽は笛・小鼓・大鼓・太鼓というお囃子方の音、かけ声や謡といった声の魅力、また所作の表現力などを通じて、人に訴えるものがあるからこそ存続しているのだと思います。何かと便利に変化してきた社会の中で、変わることなく何かを守っている空間ではないでしょうか。

女流の後進育成に奔走「歴史の一コマに」

―女流能楽師の伝統継承についてどうお考えですか。

女性の能楽師が初めて玄人として登場してきたのは1948年で、歴史はまだ浅いです。卒論研究で女性の能楽師にインタビューした際に「100年経った後に自分がそのうちの一コマであればいい」と仰っていた方がいらっしゃいました。私自身もお茶の水女子大学時代のゼミの後輩から「母校に能楽研究会を作らないか」と誘いを受け、今はそちらに稽古をつけに行っています。結婚、出産を経ても続けられる前例になればと思いますし、将来の女流能楽師が舞台に立ち続けるための一コマになれるよう、後世に繋げていきたいです。一生をかけて歩んでいく芸能なので、継承も含めて考えていきたいです。

―話は変わりますが、普門院に生まれた旦那さんとの出会いについては。

夫はお寺の生まれですが、当時上智大学神学部でキリスト教を学んでいたという変わり者です。現在は真言声明の研究や公演活動をしています。一方の私は、幼少期からキリスト教ベースで育ってきました。上智の友人に誘われてヨーロッパのキリスト教の聖地巡礼をした際、メンバーに夫がいたのが初めての出会いです。私の旧姓が青柳で、夫が新井なので、飛行機の席順が隣だったという縁もありました。この出会いによって、その後の人生が大きく変わりました。

茶畑に佇む観音堂
周囲を33体の観音菩薩像が取り囲む

―能楽師と三児の母、二足の草鞋を履く生活はどのようなものでしょうか。

半年から1年先の舞台に付随して、リハーサルや稽古の日程が決まっています。他にも学生へのお稽古、息子の幼稚園の行事への参加、小学校の保護者会での委員のお仕事、お寺の事務作業や境内の掃除などさまざまです。最初は誰にも頼らずに育児をやろうと気負っていましたが、助けてもらえる部分はありがたく助けていただくことを大切にしています。周囲の方と交わることで、子どもたちの社交性が育つので、小さくても多様な社会の中で育てていくことの大切さも感じています。そして、子どもたちが成長したら家からいったんは出て自立してほしいという意識があります。最近は、息子が子方（子役）として舞台に出演し、お互いに舞台が控えている時は、励まし合ったり、プレッシャーと戦ったり、集中力を高めたり、共感してくれることも増えてきました。

―子育てに関して周囲の環境はいかがですか。

能楽界は「女性は結婚してやめる。子どもを産んでやめる」と思われがちな世界でしたので、結婚しても子どもを産んでもやめないことが私の目標で、地道に続けることが後に続く人の前例になると思っています。これは能楽の先生や先輩方のご理解があってのことなので、周囲の方々にも感謝しています。

―ところで、歯科についての思い出についてお聞かせください。

子どもが生まれてからご縁が増えましたが、歯医者さんは身近にいることが一番嬉しいと思います。上手に子どもに対応してくれる歯医者さんはとても助かります。子どもたちは歯医者さん好きで、フッ素が好みの香りのものだと、喜んで治療を受けてくれます。

―最後に座右の銘を教えてください。

足立先生がご自身の著書「NOと言わない生き方―自分の人生への責任と愛」の裏表紙に、筆で大きく「道」と書いて私に渡してくださいました。一つの道を歩むことの大事さを伝えてくださったのだと想像します。能楽師として、母として、いろいろな立場がありますが、すべて一つの道に通じているという意識です。自分で見つけた道なら苦労や挫折があっても克服し、また歩み続けようと思えるはずなので、何か一つの道を見つけてほしいと子どもたちにも伝えています。

―本日はありがとうございました。

「菊慈童」（能楽の様子＝いずれも撮影：柴田裕之）

プロフィール　あらい・まいこ／観世流シテ方能楽師。2001年、お茶の水女子大学在学中に、故足立禮子師に出会い入門。卒業後、東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻（別科）へ進学。観世喜之師、津村禮次郎師にも師事。2007年、観世流シテ方師範認定。年2回のシテを勤める他、数々の舞台を通して能楽師としての研鑽を積む。地元所沢宝玉院や東京都内においても、大人と子どものためのワークショップ（タケノコ会）を開催するなど、普及活動も行っている。三児の母としても奮闘中。（公社）能楽協会、（公社）観世九皐会、緑泉会会員。

公演のご案内

今回インタビューした新井さんが出演される舞台が以下の日程で開催されます。新井さんは第二部の能「春日龍神」に出演予定です。公演の詳細、チケット情報等はQRコードを読み込みご覧ください。

観世九皐会10月定例会
日時：2023年10月８日（日）
【第一部】12時半～
【第二部】15時半～
会場：矢来能楽堂（新宿区矢来町60）